

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

「言葉による見方・考え方」を働かせる教材研究をめぐって

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 正雄, 生野, 金三 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000066

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



「言葉による見方・考え方」を働かせる教材研究をめぐって

Concerning Research on Educational Materials that Encourage “Word-Based Ways of Seeing and Thinking”

三浦正雄・生野金三

MIURA, Masao SHONO, Kinzo

I はじめに

平成28年12月中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申を発表した。そこでは、「何ができるようになるか」に向けて、学力本位の教育を志向して、全教科共通の目標（育成を目指す資質・能力の枠組み）が三者に亘って示されている。それは、「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」等の内容である。これに基づいて、平成29年に改訂された『小学校学習指導要領 国語編』においては、国語科で「育成すべき資質・能力」も、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの内容が国語科の目標に掲げられている。「知識・技能」においては、日常の生活において必要な国語

の特質について理解し、それを適切に使うことができるようになることを目指している。「思考力・判断力・表現力等」においては、日常生活における人との関わりの中で思いや考えを伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うことを目指している。「学びに向かう力・人間性等」においては言葉をもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことを目指している。この国語科で育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けるためには、「言葉による見方・考え方」を働かせることであり、それは国語科における重要な学びであると考えられる。そのことは、国語科の目標の冒頭に「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す」とあることから理解できよう。さらに、「言葉による見方・考え方」をめぐっては、平成28年の中央教育審議会の答申においても「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付ける

キーワード：言葉、新美南吉、宮澤賢治

Keywords : word, Niimi Nankichi, Miyazawa Kenji

こと」であるとし、その重要性を指摘している。斯様なことを踏まえて、本研究では具体的な教材において、資質・能力をよりよく身に付けるために言葉による見方・考え方を如何に働かせるか、その様相を探ることを目的とする。

Ⅱ 教材の研究—言葉による見方・考え方を働かせて

先に言葉による見方・考え方を働かせるということは、言葉と言葉との関係、言葉の意味、働き、使い方等に注目して、その関係性を問い直して意味付けることであるとした。このことを踏まえ、教材「ごんぎつね」において具体的叙述を指摘しながら言葉による見方・考え方を如何に働かせるか、その様相を探ってみる。

1 教材「ごんぎつね」の研究

1 の場面における言葉と言葉との関係

①これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。②むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。③その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。④ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。⑤そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。⑥畑へ入っていてもほりちらしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓家のうらてにつるしてあるとんがらしをむしり取って、いった

り、いろいろなことをしました。

まず、言葉と言葉との関係という観点より一の場面の⑤の文と⑥の文に着目してみる。⑤の文は、「そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。」という叙述で、⑥の文は、「畑へ入っていてもほり散らかしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓家のうらてにつるしてあるとんがらしをむしり取っていったり、いろいろなことをしました。」という叙述である。⑤の文には昼夜構わず悪戯をするごんの姿が描かれ、それに対して⑥の文には悪戯の具体的姿が三者に亘って描かれている。前者の⑤は抽象的、上位的概念であり、一方、後者の⑥は具体的、下位的概念である。⑤の文と⑥の文を言葉と言葉との関係という観点より見ると、ここではまず意味の範囲が広い抽象的な概念を述べ、次いで意味の範囲の狭いその具体例な概念を述べている。そのことに気付かせることによって、言葉への関心の第一歩を歩ませることが可能となる。つまり、見方を変えてみると抽象度の高い言葉と抽象度の低い言葉との階層状の多段階があることを理解させることにつながる。言葉の見方・考え方を働かせることによって斯様なことが可能となる。

以下に⑤の文と⑥の文の叙述を詳細に亘って見てみる。⑤の文には、「……でも」、「……でも」とあり、この語句に着目してみると、時を選ばず村に出没して悪戯ばかりしているごんの姿が浮き彫りにされてくる。②④に文に見られるごんの住み処、境涯等を念頭に置いて、⑤の文を見ると、ごんが「いたずらばかりしました。」という叙述の背景が理解できる。ごんは独りぼっちの寂しさを紛らした

めに昼夜構わず己の気の向くままに村に出没し、無目的に手当たり次第に悪戯をしたのだろう。悪戯するごんは、生来根っからの悪戯好きだったのかもしれない。ごんにしてみれば己の悪戯によって村人が如何程困っているか知る由もない。この⑤の文の内容を踏まえ、⑥の文に目を転じてみると、ごんの悪戯の様相が詳細に分かる。つまり、「……たり」、「……たり」、「……たり」等の言葉に着目することによってごんの悪戯の様相がより顕在化するのである。ここでは、ごんの悪戯の顕著な例を三者に亘って掲げ、これに類したことが他にも多く認められることを暗示している。村人へのこうした悪戯には、ごんの人間世界への関心の深さを窺わせる。三者の悪戯の様相を具体的に見てみる。「いもをほり散らしたり」は、連続しておこる二つの動作を表しており、草稿「権狐」の「芋を掘ったり」という叙述に比べて辺り構わず芋を投げ飛ばす乱暴なやり方をイメージさせる。次の「菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり」は、態々干してあるのに火を付ける行為であり、草稿「権狐」の「菜種柄に火をつけたり」という叙述に比べて酷い悪戯であることがわかる。その次の「とんがらしをむしり取っていったり」は、唐辛子の一部を無理に引き千切り、使いものにならないような状態にしてしまうことであり、草稿「権狐」の「唐辛子をとって来たり」という叙述に比べて酷い悪戯であることがわかる。このようにごんは様々な酷い悪戯をするのであるが、こうした悪戯はいずれも村人の生活を脅かすものであり、そのため村人は一日たりとも気の抜けない生活を余儀なくされるのである。

⑤の文と⑥の文に着目してごんの悪戯の様相に考察を加えた。ここでは、悪戯をめぐっ

て、言葉が如何に組み立てられているかという観点より、言葉の存在について触れた。斯様な観点より教材を見ていくことで、こうしたことが延いては教材の有する教育的機能の価値を見出すことに結び付くのである。

上記のことを念頭に置いて、一の場面の⑳の文に目を転じてみると、⑤及び⑥の文との関りで、㉑の文の意味内容がより明確になり、ごんの存在も明確になる。

㉑ ごんはほっとして、うなぎの頭をかみくだし、やっと外して、あなの外の草の葉の上にのせておきました。

㉑の文には、ごんの有する性格の二つの面が叙述されている。一つは、「うなぎの頭をかみくだし」という叙述によりそのことが分かる。鰻の頭をかみ砕くごんは小狐とはいえ、やはりそこには獣性のもつ残忍さを感じ取ることができる。今一つは、「草の葉の上にのせておく」という叙述よりそのことが分かる。これまでのごんの行為より判断すると、ごんは鰻の死骸を当然その辺りに無造作に投げ捨てるであろうという予測が付くのである。しかし、ごんはそのようなことはせず鰻の死骸を草の上に乗せて置くのである。「あなの外の草の葉」の草は、④の文に（「ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。」）を念頭に置くとき、「しだ」であることが分かる。「しだ」といっても「ウラジロ」及び「ゼンマイ」等の植物であるから、その上に鰻の死骸を乗せるとなると、その行為は、丁寧でなければならない。したがって、ここで「のせておく」という「もくろみ動詞」が使用されていることも理解できよう。「のせておく」という叙述によって、ここには獣性

と隣り合わせにもっているごんのいじらしさや優しさを感じ取ることができる。③⑨の文には、鰻の処置をめぐって二つのことが叙述されているが、そのことは取りも直さずごんの性格の二面を顕わにしていることである。前述の如く獣性のもつ残忍さは、それまでのごんの行為より容易に把握できるが、しかしいじらしさや優しさはそれまでのごんの行為より想像できないのである。それ故に「草の葉の上のせておく」という行為の中には何か別のものが潜んでいるかもしれない。しかし、その後の読みを深めていくに当たって、この叙述（「草の葉の上のせておく」）の意味内容を把握しておくことは極めて重要であるように思える。

先に⑤の文と⑥の文に着目してごんの悪戯の様相に考察を加えた。その際、悪戯という言葉の存在に気付かせる（⑤は抽象的、上位的概念であり、一方、後者の⑥は具体的、下位的概念である。⑤の文と⑥の文を言葉と言葉との関係という観点より見ると、ここではまず意味の範囲が広い抽象的な概念を述べ、次いで意味の範囲の狭いその具体例な概念を述べている。）ことによって、言葉への関心の第一歩を歩ませることが可能であるとした。

加えて、ここでは個々人の思いや考えを深めるために言葉と言葉の結合能力を付けることも可能であるとした。つまり、この言葉はどの言葉と関係があるか、どの言葉とつないで読めば意味内容が深まるか、ということについて触れた。斯様なことを念頭に置くとき、前述の如く⑤⑥の文と③⑨の文のそれぞれの重要語句を結び付けて読むとき、言葉による見方・考え方を働かせることが可能になり、国語科で育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることが可能になるのである。

2の場面における言葉と言葉との関係

③⑨の文（ごんはほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、あなの外の草の葉の上のせておきました。）の「葉の上のせておく」という読み手の意表を付くこの叙述は、例えば2の場面の後半の、②④の文から③①の文を読み取る際、重要な手掛かりを与えてくれる。

②そのばん、ごんはあなの中で考えました。「⑤兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。⑥それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。⑦ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってしまいました。⑧だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。⑨そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。⑩ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだのだろう。⑪ちよっ、あんないらずらをしなけりゃよかった。」

この場面は、ごんの思考性に関わる叙述であるが、1の場面の③⑨の文の「草の上のせておく」の叙述と関連付けて読むことによって、「わしがいたずらをして、うなぎを取ってしまいました。⑧だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。⑨そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。⑩ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだのだろう。⑪ちよっ、あんないらずらをしなけりゃよかった。」という死ぬ間際のおっかあの囁を近くで聞いているかのごとく感じ取っているごんの心根の優しさを想像することができるのである。つまり、言葉と言葉を関連付け

て読みによって、登場人物の気持ちの読み取りがより深まると考えられる。その様相を具体的にしてみる。兵十のおっかあの葬式が終わった夜、ごんは穴の中でおっかあの死についていろいろ思索（独白-②⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪によって）をめぐらすのである。兵十にとっておっかあの死は相当辛かったと思うと、ごんは嘗ての己の悪戯が自ずと思い出されるのである。ごんは、己の悪戯が今は亡き兵十のおっかあに結び付き、自責の念にかられるのである。そこには、主人公であるごんの思考性を垣間見る思いがする。ごんの独白は、適切な接続詞（「それで」、「ところが」、「だから」）を使用し、筋の通った論理的構成（思考過程には多少の飛躍が認められるものの）になっている。ことの間緯は定かでないが、論の進め方は通っていて分かり易い。独白の内容からは、臨終の折のおっかあの囁を近くで聞いているかのごとく捉えるというごんの持つ肉感性を感じ取ることができる。相手の立場になって考えたり、想像したりするごんの内面には、心根の優しさを垣間見る思いがする。ごんは、兵十のおっかあの死を契機に自責の念にかられ、そして心の優しさを顕わにするのであるが、その兆候は既に1の場面においてみることができる。前述のごとく、「のせておく」という表現によって、獣性と隣り合わせにもっているごんのいじらしさや優しさを感じ取ることができる。ごんの性格の一端（ごんがいじらしさ優しさ）を読み、そしてその後の叙述、つまりごんの独白（②⑤兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。……⑩ちよっ、あんないらずらをしなけりゃよかった。）を読んでもみると、ここではごんの性格の一端が他者との関わりにおいて顕在化したものである

ことが分かるのである。言葉と言葉とを結び付けた関連的な読みで、ここでは主人公ごんの心の変容が読み取れるのである。この独白からは、前述のごとく己の悪戯が今は亡きおっかあに結び付き自責の念にかられているごんの姿やごんの内心の優しさを読み取ることができるが、こうしたごんの特徴が兵十への償いを始める契機となるのである。

以下に、独白の②⑤の文から⑩の文について考察を加えておく。

②⑤の文では、病の床に臥していた兵十のおっかあが鰻を食べたいと言ったに相違ないとごんが推測している。兵十のおっかあがそう言ったか否か定かでないが、ごんは「ちがいない」と確信している。この兵十のおっかあが鰻を食べて言ったことをめぐって、井上敏夫は、「ここには二十四孝の物語がバックになっている¹⁾。」と前置きし、「患っているお母さんが、たけのこを食べたい食べたいと言うものですから、探しに竹やぶに行ってみたら、孟宗の孝行の心持ちに感じて、たけのこが頭を出していたんですね。それを掘りつけてきて、お母さんに上げて、お母さんの病気が治ったと言うお話です²⁾。」と指摘する。この孟宗の孝行話を媒介としてごんの独白の部分を読むと、ごんの想像（「②⑤兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。」ということ）は、筋が通っていると理解できるように思う。

②⑤で想像したごんは、「それで」という接続詞を使用して、「⑥それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。」と嘗ての兵十の様子を想像するのである。そして、この段に至って「だ」と断定している。

⑥で判断したごんは、己の行った悪戯と②⑤の文（兵十のおっかあは、どこについていて、

うなぎが食べたいと言ったにちがいない。)とを結び付けてみたとき、思い当たる節があったため「ところが」という逆説の接続詞を使用して、「²⁷ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。」に繋いでいるのである。

悪戯をして鰻を取って来たしまったことが総てだと思い、ごんは自責の念にかられるのである。²⁷の文を受けて、「だから」という接続詞を使用して、「²⁸兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかつた。」と想像するのである。²⁷の文の原因で生じたのが²⁸の文である。

病の床に伏していた兵十のおっかあは、鰻を食べることができず、畢竟ごんは「²⁹そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。」と、兵十のおっかあを思い遣るのである。ここでもごんは「²⁹ちがいない。」と確信している。

そして、兵十のおっかあの嘆（臨終の際の）を近くで聞いているかのごとく、またおっかあの苦しい思いを肉感的に感じているかのごとく「³⁰ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだのだろう。」と想像するのである。ごんの創造力のもつ肉感性や真摯な姿には、ごんの持つ心根の優しさを感じ取ることができる。

ごんは、穴の中でおっかあの死についていろいろ思いをめぐらし、そしてその結果「³¹ちよっ、あんないらずらをしなけりゃよかった。」と己の行為を後悔するのである。翻ってみれば、ごんが己の行為を後悔している³¹の文は、それ以前の叙述（²⁵²⁶²⁷²⁸²⁹³⁰）の帰結とみれる。ごんにしてみれば、一人の人間を殺してしまったという憂いは生まれて此の方初めて味わった悔恨の思いであろう。そ

の悔恨の程度は「ちよっ」「あんないらずら」の言葉で概ね理解することができよう。

3の場面における言葉と言葉との関係

①兵十が、赤いいどの所で麦をといでいました。②兵十は、今までおっかあと二人きりで、まずしいくらしをしていたので、おっかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。③「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」④こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。⑤ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がありました。……⑨いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、びかびか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持ち入りました。⑩ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。⑪そして、兵十の家のうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向ってかけもどりました。⑫とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がいどの所で麦をといでいるのが小さく見えました。⑬ごんは、うなぎのつぐないに、まづ一つ、いいことをしたと思ひました。

2の場面の叙述（²⁵²⁶²⁷²⁸²⁹³⁰³¹）を受けて、3の場面に目を転じてみると、②と③の文にはごんの兵十に対する思いが描写されている。②の文は、①の文よりごんが感じたことである。兵十はこれまで貧乏ながらもおっかあと二人で暮らすことができた。しかし、おっかあが死んでしまった今となってはそれも適わず独りぼっちである。ごんは、ここに

至って兵十が独りぼっちの身であることを確認するのである。②の文の「ては」の「は」には、何か思いがこもっているようである。

己の悪戯によって兵十を独りぼっちに追いやったと感じているごんは、兵十に対して済まないという気持ちで一杯であろう。独りぼっちの兵十の姿を目の当たりにしたごんは、「③おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と兵十が自分と同じ境遇に至ったことを発見するのである。「おれと同じ」という表現は、ごんが己の存在を知悉し、そしてそれをもとに対象を判断した結果、対象を自己と同一視したために出た言葉であろう。「おれと同じ」や終助詞の「か」に着目して③の文を見てみると、ここではごんが兵十へのしみじみとした同情を己に言い聞かせるかのごとく語っているようである。兵十も己と同じ身の上であるという思いに至ったごんが内的動揺を感じていることはいうまでもない。ごんは己の犯した罪の深さを痛感し、と同時に独りぼっちの兵十の姿に己の存在を見出すのである。この同類意識が、ごんを決定的に魅了するのである。ここには、前述したごんの心根の優しさが関わっていることは言うまでもない。

物置に身を潜めていたごんは、その場所を離れようとした矢先、鯛売りの声を耳にするのである（⑤ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がしました。）。このときのごんは兵十の姿に己の姿を見出した矢先であったが故に、その胸中は何とかしてやらなければならないという思いで一杯であったのかもしれない。光る鯛（④いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、びかびか光るいわしを両手でつかんで）を目の当たりにし

たごんは、それによって心が唆され、そして兵十に鯛を食べさせたいという思いが脳裏を去来したのかもしれない。

そして、鯛売りが弥助の家に入った暇にごんは五、六ぴきのいわしをつかみ出して（⑩ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。）、そして、それを兵十の家へ投げ込んだ（⑪兵十の家のうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向ってかけもどりました。）のである。ごんは、坂の上まで来た折り、やっと我に返ったとみえ、赤い井戸の所でまた麦を研いでいる兵十を確認（⑫とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がいどの所で麦をといでいるのが小さく見えました。）したのである。

そして、「⑬ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした」と思っている。「まず」は、「いくつかの事例、事物の中から、最も可能性のたかいもの、最も要求するもの、最も必要とされるものを第一に取り立てる気持ち」の意である。このことを踏まえて、⑬の文に目を転じてみると、ここではごんが己の行為を回顧し、そしてそれを評価し、と同時に今後も償っていくことの決意を読み取ることでできる。ごんが「いいこと」をしたと満足感に浸っていることは事実である。また、ごんは鰻の償いに兵十の家を持っていったことが余程嬉しかったと見える。それは、「⑭次の日には、ごんは山でくりをとっさり拾って、それをかかえて兵十のうちへ行きました。」という叙述が認められるからである。

上記では、まず酷い悪戯をし、村人の生活を脅かすごんの姿（1の場面の⑤と⑥の文の言葉と言葉の関係に着目して）を探り、そしてそれとの関わりで⑲の文に目を転じ、ごん

の有する性格の二面（獣性と隣り合わせにもっているごんのいじらしさや優しさ）を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して探った。ここでは、重要語句（例：「のせておく」）を取り上げ、言葉による見方・考え方を働かせ、意味内容を探ってきた。次いで、ごんの有する性格、つまり「ごんのいじらしさや優しさ」を踏まえて、2の場面のごんの思考性に関わる叙述(25②6②7②8②9③0③1—ごんの独白)について、具体的に見てきた。それは、兵十のおっかあの葬式が終わった夜、ごんが穴の中でおっかあの死について思索をめぐらす場面である。ごんは、嘗ての己の悪戯が自ずと思ひ出され、その悪戯が今はなき兵十のおっかあの死に結び付き、自責の念にかられるのである。臨終の折のおっかあの囁きを近くで聞いているかのごとく捉えるごんの姿(25兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。……30ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思ひながら死んだのだろう。31ちょっ、あんないらずらをしなけりゃよかった。)を見ると、そこには相手の立場になって感じたり、想像してりする心根の優しさを垣間見る思いがするとした。こうしたごんの特徴が兵十への償いを始める契機となるのである。ごんの償いの様相は3の場面において具体的に叙述されている。兵十を独りぼっちに追いやったと感じているごんは、兵十に対して済まないという気持ちで一杯であり、そうした折り、ごんは「2おっかあが死んでしまっは、もうひとりぼっちでした。3『おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。』」と思ひ、兵十が自分と同じ境遇に至ったことを発見する。独りぼっちの兵十の姿に己を見出し、この同類意識が、ごんを決定的に魅了するのである。物置に身

を潜めていたごんは、その場所を離れようとした矢先、鯛売りの声を耳にするのである(5ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がありました)。ごんの胸中は何とかなしてやらなければならないという思いで一杯であったのかもしれない。光る鯛(9いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで)を目の当たりにしたごんは、それによって心が唆され、そして兵十に鯛を食べさせたいという思いが脳裏を去来したのかもしれない。3の場面における叙述の様相、つまり2の場面における兵十への償いを始める契機を基盤に、言葉と言葉との関係、その関連性を問い直しながらごんが償いをする直前までの様相をいかに読み取るかにつて考察してきた。その過程において言葉による見方・考え方を働かせることについても触れた。ごんは、兵十に鯛を食べさせたいという思いが脳裏を去来した折り、「10かごの中から五、六ぴきのいわしをつかみ出して、……11兵十の家のうら口から、うちの中へいわしを投げこん」だのである。そして、「13ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思っ」たのである。ここでは、ごんが己の行為を回顧し、そしてそれを評価し、と同時に今後も償っていくことの決意を読み取ることでできる。ごんが「いいこと」をしたと満足感に浸っていることは事実である。斯様にしてごんは、その後も栗や松たけを兵十の家へ持って行き、それがごんの新たな目的となるのである。

2 教材「注文の多い料理店」の研究

宮沢賢治の童話には、その特異な世界観により異界を扱った作品が多い。異界ファンタ

ジーとでもいうべき作品であるが、これらの作品を教材として扱う場合に留意すべき点を、言葉という観点から考察してみたい。

留意すべき点とは、宮沢賢治の童話における異界への導入の仕掛け・装置、そして異界とは何かという二点である。

まず、異界への導入の仕掛け・装置についてである。異界ファンタジーの例にもれず宮沢賢治の童話作品には、読者を異界に導くために物語に言葉による様々な仕掛けや装置が設定されている。仕掛けや装置の役割とは、五感覚を始めとする様々な感覚や諸能力を揺さぶり、読者を異界へと導くことである。宮沢賢治の童話には、五感覚、そしてそれを元に生まれる感受性、想像力、創造性、分析力、思考力、霊性などを揺さぶる仕掛けや装置があり、読者はそれを味わい楽しむことにより、抵抗なく異界に入ってゆくことができるのである。

ここで取り上げる「注文の多い料理店」は、小学校や中学校の国語教科書に、長きにわたってしばしば掲載されている作品であり、宮沢賢治の代表作の一つでもある。

狩猟のために銃を担いで山奥にやってきた都会の若い紳士が、狐ならぬ山猫に化かされる物語で、一見口承伝承などにもありがちな展開となっているが、五感覚等に訴える言語表現を駆使して異界へといざなう手法は、創作童話ならではものといえよう。

まず山の設定であるが、「だいぶ山奥」「だいぶの山奥」と繰り返され、さらに具体的に「案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい山奥」「あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐い

て死んでしまいました。」というように山が深い状況を重ねて説明し、平面移動においても既に日常とかけ離れた土地であることが説明されている。五感覚やその統合感覚、そしてそこから生じる諸力を翻弄するような時空間であることが示されている。

童話の最初の部分では視覚的手法が用いられ、紳士が「イギリスの兵隊のかたちをして」いることや紳士が連れていた「白熊のような犬」という表現により読者は想像を強く刺激される。両者の異国風味にくわえ、後者は犬の巨大さが尋常ではないイメージを喚起することから読者を物語の世界に引き込む視覚的手法ともなっている。同時に山林の中という場にそぐわぬ紳士たちの拝金主義や権威主義をも読み取ることができる。さらには、二人の狩猟への関心にも自己都合とゲーム感覚の生命軽視とが表れている。

その後、案内人の猟師や巨大な犬をいともたやすく失った二人の紳士は少しは動揺するが、損失による動揺を表す会話のやり取りは拝金主義的すぎて、利己主義・生命軽視にとどまらず、滑稽でコント的であるとさえいえる。自分たちの状況を客観的に見ることもできずひたすら私利私欲にとらわれている結果、終始掛け合い漫才のごとく滑稽なのである。

絶対視していた価値観の転倒、ここで異界への通路となる聴覚的刺激（オノマトペ）が立ち現れてくる。

「風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。」このうち、「草はざわざわ」「木の葉はかさかさ」は現在でも一般的に使われる表現だが、「風がどう」「木はごんごん」は宮沢賢治作品にみられる独創的な擬音であり、実際の強い風の音や風により木が激しく揺れ

の様が的確に表現されており、この場面での授業においては、実際に学習者が自然の諸音を表現する活動を行うことで、創作童話における自然の諸音の果たす役割を強く感じ取ることができるであろう。

異界へと導入するオノマトペに続いて、次の場面では、玄関の札に記された内容の枠囲みによる視覚的な表現（「RESTAURANT 西洋料理店 WILDCAT HOUSE 山猫軒」で料理店をクローズアップするだけではなく、料理店自体を視覚的に（「玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。」）鮮やかに読者に見せている。

さらには、ここから先の屋内に登場する7つの扉とそこに記された12の呼びかけの言葉は、仕掛けや装置として、視覚を筆頭に諸感覚を駆使して、紳士とともに読者を異界へ引き入れる効果をもたらす。

7という数字には宗教的・心理的な象徴として様々な意味がある（初七日、七五三、一週間、七つの門、七福神、ラッキーセブンなど）がそれにとどまらず、7つの扉にまつわる言語表現自体が読者の諸感覚を作動させる点を確認してみたい。不可思議な7つの扉は、いわば異界＝ラビリンス（迷宮）の錯綜とした扉のような機能を果たしているのである。〈 〉は紳士たちの心情等を表す。

- 1表…硝子の開き戸、金文字、誘い→〈ひどく喜ぶ〉
- 1裏…硝子戸、金文字、大歓迎（若い・太った）→〈大喜び〉
- 2表…水いろのペンキ塗りの扉、黄いろな字、注文が多いことのことわり→〈店の人気を想像〉
- 2裏…注文が多いことのお詫び

- 3表…赤い字、整髪・靴の泥落としのお願い、鏡とブラシ→〈消失に驚き〉
- 3裏…鉄砲と弾丸を置くようお願い、黒い台
- 4表…黒い扉、帽子と外套を脱ぐようお願い
- 4裏…金物類、ことに尖がったものは置くようお願い、黒塗りの立派な金庫
- 5表…クリームを全身に塗るようお願い、硝子の壺→〈クリームを食べる〉
- 5裏…クリームを耳に塗るようお願い、ちいさなクリームの壺
- 6表…香水（酎）を振りかけるようお願い、金ピカの香水の瓶
- 6裏…壺の中の塩をもみ込むようお願い、立派な青い瀬戸の塩壺→〈不審と恐怖〉
- 7表…大きなかぎ穴が二つ、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてある扉→〈恐怖〉

また、それぞれの扉の描写には、五感覚に関わる描写が散見する。

扉や文字の色、二つの青い眼玉⇒視覚
 風の音、ドアの音、第七の扉中でのこそこそ声
 ⇒聴覚
 牛乳クリームや香水（酎）の香り⇒嗅覚
 牛乳クリームを食べる、空腹⇒味覚
 ドアを開け、そのたびに注文に応える

⇒触覚

様々な色彩やオノマトペなどを始めとして五感を縦横に駆使しながら、異界へと引き込み、そしてそこから人間世界の世俗的な世界観・価値観を転倒するのである。

この道行において、扉の言葉にはすべて多義性が読み込まれている。つまり山猫の意図する言葉の意味と紳士たちの解釈する言葉の意味とが、その立脚点の違いにより完全にずれているのである。

道行中に発せられる紳士の会話の言葉は極めて世俗的な欲望にまみれており、その観点から扉の言葉を解釈しているため、異なった観点から扉の言葉の意味を解釈することができない。紳士たちの立脚点が、異界の存在により反転されることで非常に滑稽な様相を呈してくる。お金持ちなのにもかかわらず「ただでござ馳走」してもらえると虫のいいことを考えたり、作法が厳しいと感じ「よほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。「こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」と自らの立身出世につながることを期待したりと、楽観的かつ利己的な勝手な解釈を繰り返す。

当初、語り手は客観性を保ち淡々と道行を語るが、第三の扉においては「どうもうるさいことは、また扉が一つありました。」と紳士たちに寄り添いかすかな不信感を吐露し、第三の扉の指示に従って髪をとかした後、「そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。／＼二人はびっくりして、互いによりそって、扉をがたんとして開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。」と、不思議な現象に驚きを感じてはいるものの、空腹による幻覚かもしれないという解釈の余地を残した語りとなっている。そして、この第三の「扉の内側に、また変なことが書いてあ

りました。」と明らかに不信感を表明する語りが登場している。しかしながら、語り手の挑発とは異なり、紳士たちは過剰なまでに合理的あるいは科学的な説明を繰り返そうとする。山猫の言葉の真意、紳士たちの利己的な解釈、そしてその中間に立ちながら徐々に読者に疑念や不信感を喚起して作品における言葉の多義性に気づかせてゆく語り手の存在を立体的にみてゆくのもこの作品の面白さといえよう。

最初の読みにおいては学習者は語り手に挑発されながら扉の言葉の真意を推理し、二度目の読みにおいては言葉の多義性に気付くということになるであろう。

同時にこの作品においては、異界であるところの山猫たちの世界もまた、きわめて世俗的な人間世界と相似形を描いていて縦社会的であるとともに世俗的であり、最後の扉の内側での子分の山猫同士の会話など、やはり世俗的な人間世界を映し出す鏡のような世界となっている。宮沢賢治作品には多数の異界が存在するが、作品によって異界の質は様々であり、聖なる世界、死後の世界、妖怪の世界のようなものも存在するが、この作品の場合の異界は、世俗的な人間世界の合わせ鏡のような化け猫の世界なのである。

読者もまた、五感に導かれて異界を探索するうちに、反転して自分たち人間世界のきわめて権威的で計算高く目先にとらわれている実相に明確に気づくことができるであろう。

放恣ゆえに自らの首を絞めてゆき、追い詰められた紳士たちは、「がたがたがたがたふるえだして、もうものが言え」ず、「泣いて泣いて泣いて泣いて泣いて泣く」。こうした繰り返し表現もまた、賢治童話にはしばしば登場するが、単純な言葉の繰り返しのリズムが言霊めいて、

聴覚刺激により読者を動かす。

やがて、語り手による何の合理的な説明もなく、死んだはずの犬が紳士たちを助けるために出現し、猟師もまた姿を現すことで、異界からこちらの世界に立ち戻ると、まるで昔話の狐に化かされた話のように、「上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりして」た。これもまた視覚的な表現といえよう。

土壇場の救いにより二人の紳士は無事に人間世界に帰還したわけだが、世俗的な人間世界の価値観が反転され、この世界及びその価値観が決して目に見えるほど安定したものであることを顔に刻印されたかのように、「さっき一ぺん紙くずようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになお」らない。形の上では民話の「隣の爺型」の隣に住む悪い爺さんの悪因悪果に似ているようであるが、細かい道具立てが民話とはかなり異なっており、きめ細かく近代社会の問題がいたるところに顔を出している。

しわくちゃんな顔が元に戻らなかったのは、紳士たちが異界と接触して異界に侵入し、私たち人間世界の価値観・世界観を相対化できるチャンスを手に入れることができたにもかかわらず紳士たちがそうはしようとはせず、自分たちと同様にきわめて世俗的な山猫たちの世界を通してさえ自らの世界を客観視することができなかつたためであろう。

作品中の言葉を意識しながら、この世界と異界とはどのように異なるか、これにより異界の設定にはどのような意味があるのかを、グループで討議してみるのも有効な教育活動ではないだろうか。

山猫のいるレストランのある異界とはいったいどのような場所なのか、一つ一つの言葉に注意しながら、学習者一人一人の解釈を引き出し、討論に導いてゆくことが学習過程上、非常に重要なことと思われる。

Ⅲ おわりに

本論は、表題に掲げた如く『『言葉による見方・考え方』を働かせる教材研究をめぐって』の第一報である。「言葉による見方・考え方」を働かせることをめぐっては、前述の如く平成28年の中央教育審議会の答申及び平成29年改訂『学習指導要領』等において重要視されている。本研究では、教材「ごんぎつね」（新美南吉）及び教材「注文の多い料理店」（宮沢賢治）等の文学的文章を取り上げ、読みを深めるために、如何なる対象と言葉、言葉と言葉の関係、言葉の働きや使い方等に着目するか、という観点より教材を分析してきた。例えば、教材「ごんぎつね」の場合、1の場面の⑤の文と⑥の文に着目してごんの悪戯の様相を考察する際、如何なる言葉によって悪戯が組み立てられているかという観点より言葉の存在について触れることで、それが③⑨の文の重要語句に結び付き、その意味内容がより明確になり、ごんの存在も明確になるのである。斯様な言葉による見方・考え方を働かせる教材研究は、国語科の学習指導において、国語科で育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることに結び付くのである。今回は教材研究について研究を進めてきたが、この教材研究を基盤に授業を設計し、実践していくことが今後の課題の一つである。この課題をめぐっては、稿を改めて論じることとする。

注

- 1) 井上敏夫 『続国語教材の読み方読ませ方』 光村図書、1994年、178頁

参考文献

- 秦野一宏「宮沢賢治と言葉―『注文の多い料理店』考」『海保大研究報告、法文学系』62(1)、2017年度、1-30頁
- 清田和幸「アイロニーに富んだファンタジーの授業」:『注文の多い料理店』(小学五年生)の授業『文芸教育』114、2018年春、67-76頁
- 大久保正廣「文学教材を『読むこと』の指導における『主体的・対話的で深い学び』」『福岡大学人文論叢』50(1)、2018年6月、239-273頁
- 安川勝道「二人の紳士の姿に自分自身の生き方を見る」:『注文の多い料理店』(小学五年生)の授業『文芸教育』127、2022年夏、67-77頁
- 黒瀬貴広「宮沢賢治『注文の多い料理店』の授業実践：自己の認識を問う言葉の教育を目指して」『学校教育』(1265)、2023年1月、54-59頁

